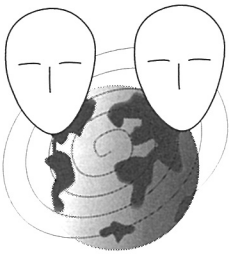
HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子供の発達と話し言葉の変化
Author(s)	仲, 真紀子
Description	複雑化社会のコミュニケーション. 対人関係の変化
Citation	日本語学, 17(11), 178-187
Issue Date	1998-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44822
Type	journal article
File Information	NG17-11_178-187.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP



子供の発達と話し言葉の変化

仲 真紀子

〈二歳三か月児と母親の対話。子供、酢味噌ののったふろふき大根を指して〉

子：これなあにー？
母：これねえ、おみそ。そいでねえ、
子：これねえ、おみそう？
母：これねえ、大根なの、お大根、お大根の上にねえ、かけるのう。

〈六歳九か月児と母親の対話。子供、食卓に用意されたものを見て〉

子：これなに？
母：さば　（小さい声で、早口で）
子：なに？
母：さば　（少し大きい声で、早口で）
子：なに？
母：さばっ　（大きな声で、早口で）
子：さばってなに？
母：さかなっ！　（「分かったか」と言わんばかりに）

1　子供の発達とコミュニケーションの変化

表情や泣くことでしかコミュニケーションできない赤ん坊が、みるみるうちに語彙や文法を獲得し、大人と対等に対話できるようになってゆく様は見事である。人の

子供の発達と話し言葉の変化

言語獲得には内的、生物学的メカニズムがかかわっていることが知られているが、一方で、素材となる文や単語は外から供給される。その供給源は、主に養育者（多くの場合母親）である。

私は幼児が対話の中で、どのように語彙を獲得するかを研究している。冒頭の例は、食事場面で縦断的に収録した対話である。テープだけを聞くと、二歳児の相手をしている母親と六歳児の相手をしている母親は、同一人物とは思われない。声のトーン、話す速度、省略の度合いなどが異なり、前者は優しく丁寧な母、後者は疲れて忙しい母というようにも見える。だが実は両方とも私である。自分としては何も変わったつもりはないのに、ずいぶんと異なる話し方をしている。

幼児の言語能力は日々、変化してゆくが、相手をする大人の対話的特徴も変化する。上で見たように、幼児に話しかける場合、発話は高く強く、母音が長いなどの音韻的特徴を持つ（岩立〈一九八八〉のレビューによる）。また単純で、文法にかない、反復やパラフレーズが多く、限定された文型が使われるなどの形式的特徴も見られる（岡本―一九八二）。Ninio & Bruner（1978）は母親が子供に絵本を読み聞かせる場面を分析し、母親は子供の注意を喚起し、質問し、命名し、確認を与えるなど一定のパタンをリードすること、しかもこのパタンは子供のレベルに応じて変化することを示した。同様に、石崎（一九九六）や村瀬他（一九九八）は日本人母子における絵本読み場面を分析し、子供の年齢が高くなるほど、母親はより能動的な役割を子供に求めるようになるという結果を見出している。また小椋他（一九九七）は「わんわん」や「ポイする」などの育児語について検討し、母親の育児語使用が子供の育児語使用に先行して減少してゆく様子を示している。母親の話し方の変化は、語彙や文法、会話のパタンを子供のレベルに調整し、発達に応じて足場をはずしてゆく過程を反映しているようだ。

さて、本稿では、このような研究のラインの上で、特定の語彙をめぐる母子対話の特徴を検討する。ここで焦点を当てる語彙は「助数詞」――枚、本、匹など、数とともに用いる接辞――である。なぜ助数詞か。助数詞は事物や運動、行為に対して直接与えられるラベルとは異なり、いわば目に見えない助数詞カテゴリーに対して用いられる語彙である。しかもそのカテゴリーは、同じ犬でも小さければ「匹」、大きければ「頭」、同じクッキーでも、細長ければ「本」、平たければ「枚」というように、分類学的なカテゴリーとは必ずしも一致しない。文脈に頼ったり、視界にあるものを指して「これは『匹』

よ」などと教えることができないので、助数詞は、母親による言語的な入力の役割を調べるのにうってつけの材料だと言うことができる。

助数詞の獲得には六～一〇年もの年月がかかると言われている（Carpenter-1991、Gandou-1984、Matsumoto-1985、内田・今井―一九九六）。例えば内田・今井（一九九六）は四～六歳児を対象に生物や事物の助数詞の獲得過程を調べ、五歳でもダチョウを「頭」と数えるなどの誤りが見られること、自覚的にルールを作ってゆけるようになるのは六歳になってからであることを示している。このように長くかかる助数詞獲得の最初の段階で、幼児はどのような言語的入力を受けるのか、ここでは年齢を下げ、二～四歳児の母親の発話を見てゆくことにしたい（詳しくは仲―一九九六、Naka, in pressを参照のこと）。

2 母子対話の縦断的事例研究 ―二歳児と母親の対話における助数詞の使用―

ここで紹介する資料は、冒頭の資料と同じ、私と女児双子の食卓場面の会話である。食卓場面を選んだのは、物理的環境や心理的状態の変動が少なく、会話の発達を比較的独立した形で記録できるのではないかと考えたからだ。ただし資料を収集しているときには、これを助数詞の分析のために用いようとは考えていなかった。

会話はおよそ週一回、一歳から四歳まで収録したが、分析を行ったのは二歳〇か月から二歳一一か月の一年間、一月あたり二回ずつの、計二一週分の資料である。各回の録音時間はおよそ四五分。資料を書き起こしたところ一九四四一発話（476kbyte）が得られた。なお、この二一回の会話は主に母親と女児双子によるものであり、父親が食事に加わったのは二回だけであった。

書き起こした会話で用いられた助数詞は全部で二一種類、助数詞を含む発話は一九四四一発話中一九六発話だった。以下の分析は、この一九六発話に基づいている。簡略化のため、二人の幼児の資料はまとめて提示する。

[1] 助数詞の種類と頻度

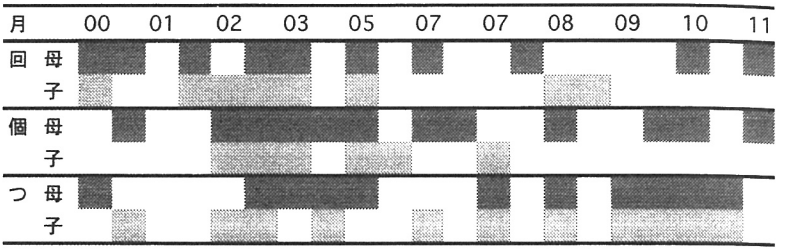
二一種類の助数詞の使用状況を**表1**に示す。各助数詞に添えられた（　）内の二つの数字は、前者が母親による使用頻度、後者が子供による使用頻度である。父親が食卓を共にしたのはわずか二回であったが、二一種類の助数詞の大半は母親―父親間で用いられていた。母親が幼児に対して用いた助数詞は七種類であり、しかも母子間で頻繁に用いられた助数詞は、「回」、「個」、「つ」の

表1　助数詞の種類と頻度

誰が用いるか	助数詞
母←→父	杯、本、週間、日、時間、分、秒、円、万、千、百、ミリ、ケース
母←→子(少)	人 (17,3)、口 (10,1)、歳 (4,5)、キロ(1,1)
母←→子(多)	回 (21,27)、個 (24,14)、つ (17,16)
子供間	番 (0,2)

注:(　) 内の2つの数字はそれぞれ母親と幼児が使用した頻度を示している。

表2　助数詞使用の同期性



注:個々のセッションにおける濃い網がけは母親の使用、薄い網がけは子供の使用

三種類だけであった。

[2]　助数詞使用の推移と母子の対応

表2は母親と子供が各々「回」、「個」、「つ」をどのセッション（食事場面）で用いたかを示している。母が用いたセッションは濃い網がけ、子供が用いたセッションは薄い網がけになっている。セッション単位で見ると、助数詞の使用には母子間で有意な同期性があり、母子ともに「回」から「個」、「つ」へと、よく用いられる助数詞が移行している。

以上、母親は子供に限られた種類の助数詞を用いていること、またその使用には母子間で対応が見られることが示唆された。会話を詳細に調べても、「かぼちゃは一個と数えましょう」などの能動的な働きかけは見られない。母親は恐らく意識的することなく、子供の用いる語彙に合わせて自らの助数詞使用を変化させているのだろう。このような現象が一般化できるかどうか、次の調査では、より多くの母子対話を縦断的に検討することにした。

3 母子対話の横断研究 ―二、三、四歳児と母親の対話における助数詞の使用―

この調査では、二、三、四歳の幼児とその母親、それぞれ一七組、一六組、一八組に参加してもらった。母子に大学の研究室に来てもらい、数の理解の調査というカバー・ストーリーのもとで調査に参加してもらう。部屋には大きな机があり、ポッキーとスプーン（「本」で数えることが期待される）、平たいクッキーと皿（「枚」が期待される）、山型クッキーとアメ（「個」が期待される）、カップ（「杯」が期待される）の七種類の事物が各々四個ずつ並んでいる。机の一方の側に母親と子供に座ってもらい、もう一方の側に実験者と補助者が座った。調査は三つの段階から成っている。

まず母親に事物が描かれた図版（例えば、アメ三つ）を示し、「図版に描かれている物をその数だけ、お子さんにとってもらってください」と教示する。一枚に一種類の事物が描かれており、全部で七枚の図版が用意された。この段階で、母親が子供に対しどのような助数詞を用いるかを調べる。二歳児と母親の例を示そう。

母：まーるいクッキーをふたつもってきて。クッキー。まーるいの、ふたーつ。もうひとつ。
子：もうひとつ。
母：うん。

幼児が七種類の事物を全部取り終えたら、次の段階に進む。母親に「今度はお子さんに、今取ってもらったものを数えてもらってください」と教示し、子供が事物を数えるときにどのような助数詞を用いるか調べる。

母：じゃあね、クッキー。いくつあるかな。
子：クッキー、ふたつ。
母：ふたつね。これはピンポーン。

最後に、母親に、第一段階で子供に対して行った課題を大人（補助者）に対して行ってもらった。これは母親が大人に対してはどのような助数詞を用いるか、調べるためであったが、ここでは触れないことにする。その後、調査の意図を明かし、家庭での助数詞使用状況などをアンケートで答えてもらった。

会話はすべてテープレコーダーで録音し、後で書き起こした。生起した助数詞を分類しカウントしたところ、

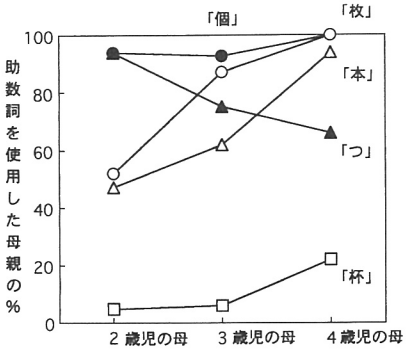


図1　子に対する、母親の助数詞使用

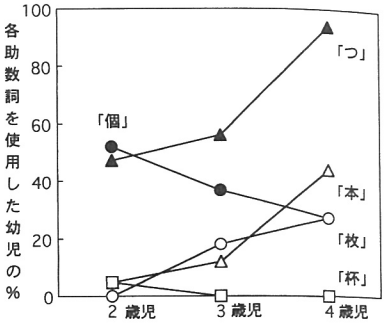


図2　子の助数詞使用

七種類の事物すべてに「個」、「つ」の使用が見られ、加えて平たいクッキーと皿では「枚」、ポッキーとスプーンでは「本」、コップの水では「杯」が用いられた。また頻度は少ないが、「いーち、にーい」など数だけの表現や「○ちゃんの分と△ちゃんの分」というような表現も見られた。

[1] 用いられた助数詞の種類

七種類の事物を込みにしたときの、「個、つ、枚、本、杯」の使用者率（助数詞を使用した者の割合）を**図1、2**に示す。図1は母親、図2は幼児である。幼児の年齢が低いほど、母親が「個」や「つ」を使用する率は高い。また、幼児の年齢が上がるにつれ、母親は「枚」や「本」など、特殊な（特定の形態に固有な）助数詞を用いるようになる。母親は幼児に対し限られた種類の助数詞を用い、幼児の年齢に応じて制限の度合を変化させると言えるだろう。幼児も母親同様、年齢が上がるにつれ「枚」と「本」の使用が上昇する。だが「個」と「つ」は母親の場合とは異なり、減少することはなかった。「個」、「つ」の減少は四歳よりも後になるのかもしれない。

[2] 助数詞の使用頻度

図3は、母親がひとつの事物当たり使用した助数詞の種類と頻度を示している。助数詞の種類は二、三、四歳でさほど変わらないが、頻度は二歳児で特に高い。これは、二歳児の母親が三、四歳児の母親よりも、同じ助数詞を何度も繰り返し用いていることを反映している。例を示そう。

二歳児の母：今度はビスケットどこにあるかな。ビスケットふたつください。ビスケットふたーつ。ふたーつちょうだい、ビスケット。ビスケットをふたつちょうだい。大きいのがいいな、まーるいの。ふたつちょうだい。はい、ありがとう。
（「つ」を五回使用。）

四歳児の母：じゃあね、たいらなビスケットを一枚。
（「枚」を一回使用。）

[3] 母親によるフィードバック

子供が事物を数えた際、子供が用いた助数詞とは異なる助数詞を用いて、母親がフィードバックを返すことがあった。また、子供が助数詞を用いずに、数だけ述べた場合、母親が助数詞を付けてフィードバックを返すことがあった。このようなフィードバックは、以下のように分類された。

(a)子供が「三」など、数だけを述べたとき、母親が「三個ね」、「三つね」など、一般的な助数詞を用いてフィードバックを与える。

(b)子供が「三」など、数だけを述べたとき、母親が「三本ね」、「三枚ね」など、特殊な助数詞を用いてフィードバックを与える。

(c)子供が「三個」、「三つ」など、一般的な助数詞を用いた時、母親が「三本ね」、「三枚ね」など、特殊な助数詞を用いてフィードバックを与える。

(d)子供が不適切な特殊な助数詞（スプーンに対する「枚」、平たいクッキーに対する「本」など）を用いた時、母親が適切な助数詞を用いてフィードバックを与える。

各フィードバックの生起頻度を**図4**に示す。(a)や(b)のように「数」を「数＋一般的助数詞」に置き替えるフィードバックは相対的に二、三歳児の母親で多く、(c)や(d)のように特殊な助数詞を含むフィードバックは三、四歳児の母親で多い。母親は子供の助数詞使用のレベルに応じて、一般的な助数詞からより特殊な助数詞へと、助数詞の使用を精緻化する方向でフィードバックを変化させていると言えよう。

以上、縦断研究と同様、母親は幼児に対して用いる助数詞の種類を制限し、子供の年齢に応じて制限の度合を

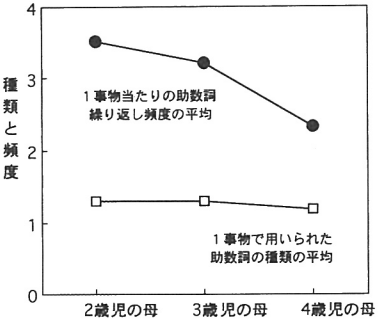


図3　用いられた助数詞の種類と頻度

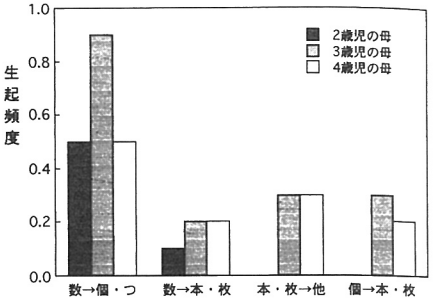


図4　母親によるフィードバック

変化させること、助数詞使用の変化は母親の方が先行していること、母親は助数詞の使用を精緻化する方向でフィードバックを行っていることなどが示された。

4　人間関係の発達とことばの変化

母親は幼児の月齢や年齢に応じて、用いる助数詞の種類、頻度を変化させる。また幼児の助数詞使用に合わせたフィードバックを行う。母親は精密な助数詞教示プログラムを持っていて、子供の様子を見ながらそれを実行しているのだろうか。それとも子供の中にある語彙獲得プログラムが、完成した言語使用者である母親から自分のレベルに応じた情報を引き出すのだろうか。

私はかつて安田とともに次のような調査を行ったことがある（Naka and Yasuda-1995）。留学生と日本人学生に日本語および英語（留学生の母国語）で簡単な会話をしてもらう。得意な言語、不得意な言語で話した場合、言語的に優位に立つ者（日本語の場合は日本人学生、英語の場合は留学生）がどのようなフィードバックを行うのか調べるのが目的だった。被験者は日本人学生が二人（A、B）、留学生が三人（X、Y、Z）である。A、B各々がX、Y、Z各々とペアになり、「日本で安く暮らすには」、“Why

表3　発話のカテゴリー

カテゴリー	内容	例
開始	新しいトピックの開始	日：え、じゃあまず一つめ、どういうときに物価が高いって感じますか？
拡張	相手の発話の拡張	(留：あの、食事をするとか、それをすごく高いと思います。) 日：うーん、じゃ、時々そういう食事とかもしたりするんですか、高い。
説明	語句、状況の説明	(日：お金の管理というか、そいうのはどういうふうにしてます？) (留：ん？　もう一度。) 日：あの、お金、物価が高いですよね。だから使う工夫っていうか、使い方っていうか。
言い換え	相手の言ったことの言い換え	(留：あの、だいたいbudget英語でbudgetていうけど、日本語ではわかんない。) 日：予算、予算かな。
繰り返し	相手の言ったことの繰り返し	(留：そういういう店には行かない。) 日：行かないんだ。
質問＋	新しい情報を問う	日：貯金とかしてます?
質問－	明確化の要求	(日：お金の管理というか、そいうのはどういうふうにしてます？) 留：ん？　もう一度。
答え＋	拡張された答え	(日：え、じゃあまず一つめ、どういうときに物価が高いって感じますか？) 留：うーん、お金、お金がだんだん少なくなると、やっぱり物価が高いと思います。
答え－	「はい、いいえ」の応答	(日：うーん、じゃ時々、そういう、食事とかもしたりするんですか、高い。) 留：うん、はい。
反応	内容を伴わない応答	(日：あの、お金、物価が高いですよね。だから使う工夫っていうか、使い方っていうか) 留:あー。

注：日は日本人学生、留は留学生の発話を示している。

aren't Japanese good at speaking English?" などのトピックで五分ほどの会話をした。

参加者の発話を**表3**をもとに分類したところ、日本語でも英語でも、言語的に優位に立つ者は高い頻度で「説明」したり「言い換え」を行ったりし、話者間のギャップを補っていた。優位に立つ日本人学生は新しい情報を求める「質問＋（プラス）」を多く行い、一方、優位に立つ留学生は明確化を求める「質問－（マイナス）」を行うなど、日本人と留学生では方略に違いも見られた。だが、いずれにせよ、自分が優位に立つ場合とそうでない場合とで、話し方は異なっていたのである。

会話には、言語的ギャップから必然的に生じる話し方の変化と、個人が持っている方略との両方が関与するのかもしれない。話者同士が互いに与え会う言語情報が、話し手のど

ちらかにだけ帰属するのではない、ダイナミクスとしての「話し方」やその変化を規定するのだとしたら、これは大変面白い問題だと思う。

引用文献

Carpenter, K. (1991) Later than sooner: extralinguistic categories in the acquisition of Thai classifiers. Journal of Child Language, 18, 93-113.

Gandour, J., Petty, S. H., Dardaranada, R., Dechongkit, S., & Mukngoen, S. (1984). The acquisition of numeral classifiers in Thai.Linguistics, 22, 455-479.

Matsumoto, Y. (1985) Acquisition of some Japanese numerical classifiers: the search for convention. In Papers and reports on child language development.The Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University. pp. 79-86.

Naka, M.in press The acquisition of Japanese numerical classifiers by two-to four-year old children: the role of caretakers' linguistic inputs. Japanese Psychological Research.

Naka, M., & Yasuda, H.(1995) Asymmetrical conversation between a Japanese native speaker and a foreigner. The Bulletin of The Faculty of Education, Chiba University, 43 (1), 1-6.

仲真紀子（一九九六）「対話における語彙獲得―助数詞の獲得に関する予備的分析―」（『千葉大学教育学部研究紀要』四四巻一号、七一～七八頁）

石崎理恵（一九九六）「絵本場面における母親と子供の対話分析：フォーマットの獲得と個人差」（『発達心理学研究』七、一～一一頁）

岩立志津夫（一九八八）「言語獲得」（原野広太郎・小嶋秀夫・宮本美沙子・無藤隆・高橋恵子・湯川良三（日本児童研究所）編『児童心理学の進歩 1988年版』、金子書房、七五～九五頁）

小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり（一八八七）「母親の育児語と子供の言語発達、認知発達」（『神戸大学発達科学部研究紀要』五巻一号、一～一四頁）

村瀬俊樹・マユーあき・小椋たみ子・山下由紀恵・Dale, P. S.（一九九八）「絵本場面における母子会話：ラベリングに関する発話連鎖の分析」（『発達心理学研究』九巻二号、一四二～一五四頁）

岡本夏木（一九八二）『子供とことば』（岩波新書）

Sanches, M (1977) Language acquisition and language change: Japanese numeral classifiers.In B. G. Blount., M. Sanches, M., & J. J. Gumperz (Eds). Sociocultural dimensions of language change. New York: Academic Press. pp. 51-62.

内田伸子・今井むつみ（一九九六）「幼児期における助数詞の獲得過程―生物カテゴリーと助数詞ルールの獲得―」（『教育心理学研究』四四巻二号、一～一〇頁）

記：二節の縦断研究、三節の横断研究には文部省科学研究費補助金重点領域研究（一）0 52061037 06205103 07202103 08202102の補助を受けた。

（なか・まきこ）　千葉大学助教授